

# 経済的観点をを用いて保育実践を捉える意義についての試論 —『貨幣論』をたよりに保育実践を解釈する試みを通して—

古林 智美

千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程

本稿は、経済学者である岩井克人の著書、『貨幣論』(筑摩書房、1993)をたよりに、園通貨を使っている保育実践を解釈するという試みである。ミクロな視点では、園通貨を持っていることが他者とのつながりをもたらし、A 幼稚園という集団が貨幣共同体的なあり方となり、それが個人間での親しさや大人との利害関係とは異なる関係を子どもたち同士の間で生み出すことなど、さまざまな影響を与えることを考察できた。また、貨幣共同体的な集団では、ユートピア的な環境を自分たちで維持していこうという状況が生まれ、結果的に子どもたちに利他的な視点を持つきっかけをもたらし、自分たちで自分たちの生活をつくっていくという力を養うことにつながる可能性が示唆された。マクロな視点では、子どもたちの言動に関して、これまで以上に深い考察が可能になるなど、経済的観点から教育実践を捉えることの可能性について示唆が得られた。

キーワード：幼児教育、保育実践研究、園通貨、経済、『貨幣論』

## 1. はじめに

本稿では、経済学者である岩井克人の著書、『貨幣論』(筑摩書房、1993)をたよりに、市川市にある私立の認定こども園 A 幼稚園<sup>1</sup>の実践を捉えることを試みる。

これまでの幼児教育の保育実践において、子どもの遊びと経済との関係について取り上げたものは確認できない<sup>2</sup>。しかしながら、多くの人が子どものころ遊んだことがあるだろう、お買い物ごっこやおみせやさんごっこといった遊びは、子どもたちが目にしている、大人たちのモノの売り買いを模倣した遊びであることはいまでもない。それは、大人たちの経済活動を模倣しようとしている、とも言い換えることができよう。もちろん、子どもたちが模倣するのは、大人たちの経済活動のある側面ではなく、子どもたちのこのような遊びは大人から見れば現実の経済と乖離しているとみなされるだろう。だが、大人を模倣することから始まったとしても、次第に子どもたち自身によって、遊びが子どもたちの園生活の一部の要素として組み込まれる場合、そのような園生活の営みに、子どもたちなりの経済を見出すことができるだろう。そうであるなら、子どもたちなりの経済がどうなっているのか、という視点、経済的観点から保育実践を研究する方向性もありうるのではないだろうか。そのような研究の一步として、本稿を位置付ける。

また、A 幼稚園という特定の園を取り上げる理由として、独自の園通貨が遊びの中で日常的に使われており、先行研究として園通貨についての分析が既にある<sup>3</sup>ことが挙げられる。詳しくは 3 章でみていくが、既に教育学の観点からある程度分析されている園通貨を、本稿で新たに捉え直すことができた場合、それは実践を経済的観点で捉えることの意義を示唆することになるだろう。

本稿の目的は、ミクロな視点・マクロな視点と異なるレベルの視点で 2 つある。ミクロな視点としての目的は、A 幼稚園における園通貨を『貨幣論』の視点から解釈をすることを通して、貨幣という経済の要素が、子どもたちにいかなる影響を与えているかその一端を明らかにすることである。マクロな視点としての目的は、『貨幣論』を用いた考察を通して、経済的観点から教育実践を捉えるということの可能性を考察することである。上記のような目的を見据え、本稿では、まず『貨幣論』を概観し、論を支えている複数の経済学概念を整理する。その上で、A 幼稚園の園通貨「ガバチョ」について具体的な事例を紹介しながら考察をする。なお、筆者は 2020 年度以降、継続的かつ積極的な参与観察を行なっている。実践の記述は、ビデオ撮影やフィールドノート、保育教諭に対してのインフォーマル・インタビューをもとにして記載している。

## 2. 『貨幣論』の概要

### 2.1. 『貨幣論』の構成

『貨幣論』(以下、本著と記載)は、経済理論、法理

Tomomi FURUBAYASHI : An Essay on the Significance of Using an Economic Perspective to View Childcare Practice—Through an Attempt to Interpret Childcare Practices Using *The Theory of Currency*—  
Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs, Chiba University

論、日本経済論を研究分野<sup>4</sup>とする経済学者の岩井克人によって1993年に出版された。経済学の分野では、二つの対立する資本主義観があるとされる<sup>5</sup>。第一に、始祖をアダム・スミスとする新古典経済学派である。この立場の経済学者たちは「資本主義をどんどん純粋にしていき、地球全体を市場によって覆い尽くせば、効率性も安定性も実現される「理想状態」に近づくという主張」<sup>6</sup>をしている。第二に、ケインズが代表としてあげられる不均衡動学派である。この立場は、資本主義には理想状態などなく「資本主義を純粋にしていくと、確かに「効率性」を増すが、「逆に「安定性」が減ってしまう」と考えている<sup>7</sup>。岩井は資本主義が本質的に不安定であるという後者の不均衡動学派の立場から本著を執筆している。また本著の特徴として、岩井自身も「じぶんがいつの間にやら経済学とよばれる領域を乗り越えてしまっている」<sup>8</sup>と述べているように、本著では言語学や哲学、人類学的な知見などが用いられ、経済学の領域に留まらない視点で経済について考察していることが挙げられる。

本著では、貨幣とは何か、という問いを巡る考察を通じて「資本主義」にとって何が真の危機であるかが論じられている。本著は序の他、5章から構成されており(図1)、第一章から第三章の前半、第四章・第五章の後半で内容を大まかに分けることができる。

序	
第一章	価値形態論
第二章	交換過程論
第三章	貨幣系譜論
第四章	恐慌論
第五章	危機論

図1 『貨幣論』の構成

第一章から第三章では、「貨幣とは何か?」という問いに対する岩井の出した結論である「「貨幣とは貨幣として使われるものである」という木で鼻をくくったような答えが、けっしてたんなるこけ脅しでも同義反復でもない」<sup>9</sup>ということ、今なお、経済学界に多大なる影響を与えているカール・マルクスの著書、特に『資本論』を読み直し、マルクスに一定の論拠を求めつつも、その欠陥を示し、発展させる形で自身の論を打ち立てている。

マルクスや古典派経済学者の貨幣論は、労働価値論の命題である貨幣は商品である、という貨幣商品説を提唱していた。貨幣商品説とは、「貨幣とはそれ自体が価値をもつ商品<sup>10</sup>をその起源とし、ひとびとのあいだの交換活動のなかから自然発生的に一般的な等価物あるいは一般的な交換手段へと転化したという主張」<sup>11</sup>である。

このような貨幣商品説とは異なり、岩井は、貨幣とは貨幣として使われるもの、つまり、なんの実体的な根拠

を必要とせず、「全体的な相対的価値形態(社会化する主体)と一般的な等価形態(社会化される客体)というおたがいがおたがいを成立させるための根拠となっているふたつの形態を同時に演じている貨幣という存在は、まさにみずからの存在の根拠をみずからで宙吊りのつくりだしている存在」<sup>12</sup>と主張している。この主張に至るに当たって、岩井はマルクスの価値形態論に着目をし、丁寧に再検討し、マルクスの最終的な結論の誤りを指摘した上で、貨幣は貨幣であるがゆえに貨幣である、という無限循環法によって宙吊りの支えられている、という岩井独自の価値形態論を導き出した。

第四章と第五章では、「恐慌(Krise)」こそが資本主義にとっての危機(Krise)であるというマルクスの考えを批判し、「資本主義」にとって真の危機は、ハイパー・インフレーションであるという岩井の考えが論じられている。本稿でこの論を丁寧に記述することは紙幅の都合上難しい。そのため、論を支えている概念を紹介しながら、岩井の論の展開を追っていきたい。具体的には、「流動性」ならびに「流動性選好」という経済学の概念、岩井が結論に至る過程で展開した、人々の「無限の期待」という貨幣の存在を支えている概念、そして岩井が本著を通して見出した現代の社会集団の捉え方を示している「貨幣共同体」を取り上げる。

## 2.2. 流動性と流動性選好

岩井は、恐慌では商品の使用価値は無価値になるが、その一方で貨幣の方は価値をますます高めていくことを指摘している。ただし、高まるのはモノとしての貨幣の価値ではないという。恐慌の中で人々が欲しているのは、貨幣が持つ「流動性(liquidity)」である。この「流動性」は、「時間をえらばずにどのような商品にも交換できる容易さの程度」<sup>13</sup>と不均衡動学派であるケインズによって定義された経済学の用語である。また、貨幣がもつ流動性に対する人々の欲望を、ケインズは「流動性選好(liquidity preference)」と呼んでいる。人々に流動性というものに対する欲望があるかぎり、人々は資本主義社会の永続性を信じているということになる。逆に言えば、もし資本主義社会が崩壊することがあるとしたら、それは人々が流動性というものに対してなんの欲望も示さなくなってしまうときであるといえる。

「流動性」を踏まえて、恐慌を捉え直してみよう。恐慌の中で人々は貨幣を蓄えておきたがるが、それは、貨幣が持つ流動性を欲しているからであると考えられる。言い換えれば、恐慌は人々の流動性選好が非常に高まっている状況である。この状況の前提として、人々は資本主義社会の永続性を全く疑っていないことを前提としている状況であるといえる。そのため、岩井は、恐慌は資本主義社会の危機ではないと主張しているのである。

では、資本主義社会の崩壊、つまり人々が流動性に対する欲望を失うときはどのようなときであろうか。岩井は、「世界貨幣そのものをめぐるハイパー・インフレーション」<sup>14</sup>であると述べている。

なぜならば、貨幣を支えている「無限の期待」が失われている状況こそがハイパー・インフレーションであるからである。では、「無限の期待」とは何を意味する言葉なのだろうか。そのためには、そもそも、貨幣としての価値は何に支えられているのかについての岩井の考えを追う必要がある。

### 2.3. 貨幣を支えている「無限の期待」

岩井は、貨幣論を展開していく過程で、人々が貨幣を貨幣として使う理由について迫る。岩井は一万円札を例に出して、その理由を次のように説明している。<sup>15</sup>

もちろん、将来のいつの日かに、だれかほかの人間がその一枚の紙切れを一万円の価値をもつ貨幣としてひきうけてくれるからである、いや、ひきうけてくれると期待しているからである。

モノとしてはただの紙切れであり、一万円の価値を到底持たない一万円札を人々が使うのは、他の人が一万円の価値を持つ貨幣として引き受けてくれると期待しているからであるという。ここが商品と貨幣との大きな違いであり、商品是有用なモノとしての価値をもっているがゆえに、商品の価値を支えているのは、誰かにとっての自身の欲望である、と岩井は述べる。しかし、貨幣は、貨幣の価値を支える他人の欲望自体が、別の他人の欲望の媒介としての意味しか持っていない。未来の誰かが貨幣を貨幣として引き受けてくれると期待しているため、今の自分は貨幣を貨幣として使うことができるのである。つまり、貨幣を貨幣として維持していくために、未来の誰かが引き受けてくれる期待という、未来への先送りが行われている、というのが岩井の考えである。

このことを踏まえて、「最後の審判」が確実に来ると人々に知れているとすると、と岩井は例を出す。<sup>16</sup>最後の審判の日が来てしまえば、次の日は存在しない。ということは、一万円札を一万円の価値としてそっくりそのまま引き受けてくれる人間がこの世からいなくなってしまう。当然、最後の審判の日には、一万円札を、商品との交換に引き受けてくれる人は存在せず、一万円札は単なる一枚の紙切れになってしまう。ゆえに最後の審判の一日前にも、次の日には一万円の価値として渡す人間がひとりもいなくなる一万円札を、モノとして役立つ商品との交換を引き受けてくれる人はいないはずである。同様に、最後の審判の二日前、その前の日にも…と最後の審判の日から暦を逆にめくっていけば、「この今とい

うときにおいても、無が有とひきかえられる不等価交換は成立しえず、買い手の手にある一万円札は、一万円の価値として手わたす未来のほかの人間がひとりも存在しないたんなる一枚の紙切れでしかなくなってしまう」<sup>17</sup>という。つまり「未来が無限であることをやめたその瞬間に、後ろ倒しの論理（後方帰納法）によって、だれも貨幣を貨幣としてもとうとはしなくなる」<sup>18</sup>というのが岩井の考える「最後の審判」と貨幣の関係である。

上記を踏まえると、貨幣を貨幣として、今ここで引き受けてもらうためには、貨幣を貨幣として引き受けている人間が、無限の未来まで存在し続けることが期待されなければいけない。しかし、この期待はどこまでも主観的な期待でしかない。岩井は、「客観的な根拠がないとしたら、いったい何を実践的な根拠としているのだろうか？」<sup>19</sup>と問いを立て、「貨幣が今まで貨幣として使われてきたという事実」<sup>20</sup>を答えとしている。貨幣ははじめから貨幣なのではなく、「無限の未来まで貨幣は貨幣であるというひとびとの期待を媒介として、今まで貨幣であった貨幣が日々あらたに貨幣となる」<sup>21</sup>という。

### 2.4. 貨幣共同体

岩井は、本著の中で、「貨幣とは、言語や法と同様に、純粋に「共同体」的な存在である」<sup>22</sup>と述べており、「同一の貨幣を共有することによってむすばれる人間の集団のことを「貨幣共同体」」<sup>23</sup>と呼んでいる。なお、ここでの共同体とは、マックス・ウェーバーをはじめとする社会学において社会分析で用いられる共同社会（Gemeinschaft）と利益社会（Gesellschaft）の対立概念、という文脈上に位置づくことに留意したい。岩井の「貨幣共同体」に戻ろう。岩井は、貨幣共同体について、「伝統的な慣習や情念的な一体感にもとづいた通常の意味での共同体（Gemeinschaft）とはその様相をまったく異にして」<sup>24</sup>おり、「貨幣を貨幣として使うというひとびとの行動に先行するなんらの社会的事実も存在していない」<sup>25</sup>と述べている。また、貨幣共同体において、人々が貨幣を貨幣として使うのは、人々が貨幣共同体の構成員であるからではなく、むしろ逆で、人々は貨幣を貨幣として使うことを目的として共同体の構成員となると述べている。このような意味で、「貨幣共同体とは、利害の一致にもとづいて合理的に形成される社会的関係としての利益社会（Gesellschaft）にほかならない」<sup>26</sup>と位置づけた。ただし、この貨幣共同体は、利益社会の理念型としての目的結社（Zweckverband）とは根本的に異なった存立基盤を持っているという。貨幣共同体では、目的結社、例えば営利企業や政治団体とは異なり、契約も定款も存在せず、貨幣を貨幣として使うことはひとりひとりの自由に任せられている。つまり、「ひとびとが同じ貨幣を貨幣として使っているという

このみが貨幣共同体を貨幣共同体として成立させているのであり、その貨幣を貨幣として使うことはまったくひとりひとりの自由にまかせられている<sup>27</sup>のである。

伝統的な慣習や情念的な一体感にもとづいているのでもなければ、目的合理的にむすばれた契約にも基づいているのでなければ、何によって貨幣共同体を貨幣共同体として成立させているのであろうか。岩井は、「ただたんにひとびとが貨幣を貨幣として使っているという事実のみ」<sup>28</sup>が貨幣共同体を貨幣共同体として成立させているのであり、貨幣が未来永劫貨幣として使えるという期待、ひいては貨幣共同体が未来永劫にわたって存在し続けるという期待に支えられている、と述べている。

私たちが今生きるこの資本主義社会は、貨幣共同体の基盤の上に成立していることはいまでもない。恐慌という現象では、貨幣共同体の未来に対する信頼は失われていない。むしろ、貨幣共同体の基盤の上に成立している資本主義社会の未来にたいするもっとも熱烈なる期待の表明の他ならない。だからこそ岩井は、この貨幣共同体の未来に対する信頼を失う現象、貨幣が貨幣としての価値をこの世から消し去ってしまう、ハイパー・インフレーションが資本主義社会にとってより根源的な困難であると考えたのである。

### 3. A 幼稚園と園通貨「ガバチョ」について

A 幼稚園における園通貨を本著の視点から解釈をする前に、前提となる A 幼稚園の概要を紹介したい。なお、本章の A 幼稚園の概要や園通貨については、既に古林（2021）でまとめられており、本稿で考察する上で関わりがある部分を簡略して記載していることを断っておきたい。また、以下「まち」「おみせ」など鉤括弧付きの表記があるが、古林（2021）と同様、鉤括弧付き表記のモノ・コトは、あくまでも鉤括弧がないモノ・コトを模倣することから始まった、異なるモノ・コトを示している。例外として園通貨「ガバチョ」や「おみせ」の名前（のちに出てくる「オシャキラ」）については、A 幼稚園独自の固有名詞であることをわかりやすくするために鉤括弧付き表記としている。

A 幼稚園は、2021 年度に幼稚園から認定こども園に移行しており、現在 1~5 歳児クラスがある。1、2 歳児クラスの定員は各 12 名、3~5 歳児クラスの定員は各 46 名であるが、2022 年度の 5 歳児クラスは例外的に 54 名が在籍していた。なお、筆者は 2022 年度 A 幼稚園の 5 歳児クラスをフリーという立場<sup>29</sup>で担当しており、本稿では 5 歳児クラスを対象にして記述をしている。

A 幼稚園はいわゆる自由保育の形態をとっている。3~5 歳児クラスの保育室には、図 2 のように子どもたちが自分たちの関心に根ざして作り上げた「おみせ」が

さながら「まち」のように並んでおり、店先にはさまざまな商品がみられ、ほぼ 1 年を通して、図 3 のような園通貨「ガバチョ」を介して商品のやり取りが行われる、などといった一風変わった環境がみられる。このような環境の中で、子どもはお客さんとなり、自分のお財布から「ガバチョ」を取り出し、「おみせ」にある商品を買うという様子が A 幼稚園の日常としてみられる。「おみせ」でやりとりをする店員も、もちろん子どもである。「おみせ」の子は、商品を作ったりサービスを考えたりしながら、「おみせ」を運営する。そのような子どもたちの振る舞いを A 幼稚園では「活動」と呼んでいる。



図 2 子どもたちが作り上げた「おみせ」



図 3 園通貨「ガバチョ」

このような独自性の強い保育実践の複雑な保育構造について着目した阿部（2017）や、子どもたちの経済活動並びに、時間経過による経済活動の発展に着目した藤川（2018）など、A 幼稚園の実践はいくつかの研究の対象となっている。また、「ガバチョ」の使い方や A 幼稚園が園通貨を保育に用いている意図など、仔細については古林（2021）に詳しく記述してある。ここでは簡単に「ガバチョ」の特徴を述べるに留める。

「ガバチョ」の使い方の大きな特徴の一つとして、子どもたちによって日常的に使われていることが挙げられる。「ガバチョ」は、近年は 4、5 月に使われ始めることが多く<sup>30</sup>、一度使われ始めるとその後「ガバチョ」は年度末まで子どもたちによって使われ続ける。年によって異なるが、基本的には年度末に一度活動はリセットされ、「ガバチョ」も春休みに入ると同時に一度保育者によって回収される。それが毎年繰り返される。

A 幼稚園では多様な「おみせ」があり、その「おみせ」の商品やサービスの売り買いの場面で「お金」が使われているが、どの商品・サービスについて「お金」を使うかといった使用方法について、保育者が子どもに指導す

ることはない。

また「ガバチヨ」の流通も、子どもたちに委ねられている。毎年、5 歳児クラスで園通貨の管理を行う「銀行」という「おみせ」ができる。具体的な店名や細かい活動内容は年によって異なるが、園通貨を管理するという活動が中心になることは共通している。「お金」をもっていない人（子どもだけでなく保育者も含む）は、「銀行」から「ガバチヨ」紙幣をもらうことができる。そのルールは、保育者からそうするように示されるのではなく、毎年、子どもたちの間で暗黙のうちに共有されている。そのため、多くの子どもたちが「ガバチヨ」を求めた場合には「銀行」の「ガバチヨ」がなくなってしまうという状況も当然発生する。そのような状況を解決するために、「銀行」は他のおみせから売り上げをもらうことにしよう」と「ガバチヨ」が銀行からお客さんへ、お客さんから「おみせ」へ、そして「おみせ」から銀行へ、と循環するようにする、などといった「ガバチヨ」の流通に関するルールを決めたり、対応策を考えたりということも、子どもたち、特に「銀行」の子どもたちの活動の一つとして行われている。

また、「おみせ」で商品売って得た「ガバチヨ」の扱いも子どもたちに委ねられている。子どもたちには、個人の「ガバチヨ」と「おみせ」の「ガバチヨ」を、区別している様子がみられる<sup>31</sup>。また、「おみせ」の「お金」を自分のお財布にいれるといったこともあまり見られない。一方で、「おみせ」の活動の中で使うものについては、その「おみせ」内の了解(暗黙の了解を含む)のもと「ガバチヨ」を使うこともある。こういった「おみせ」の「ガバチヨ」の扱いについて、保育者が一方的に何かしらのルールを決めて教えるといったことはない。保育者は、園内の「ガバチヨ」総流通量を概ね把握しており、必要があれば働きかけるといった援助の可能性を考慮しているが、基本的には「ガバチヨ」の扱いを、子どもたちに委ねている。

#### 4. 『貨幣論』からみる「ガバチヨ」

##### 4.1. 「ガバチヨ」と他者

では、2 章で確認した本著から「ガバチヨ」を捉えていこう<sup>32</sup>。本著においては、貨幣の存在は、無限循環法によって宙吊りのように支えられている。そしてそれは、「商品と商品とのあいだの交換を媒介しつづける」<sup>33</sup>というように、商品同士ならびにそれをやり取りする人間同士のつながり続けている関係性を貨幣が体現していることを意味する。さらに、貨幣ははじめから貨幣なのではなく、無限の期待を媒介として、今まであった貨幣が日々新たに貨幣となるのであった。そしてそれは貨幣が今まで貨幣として使われてきたという事実によって支

えられているという。

「ガバチヨ」においても同様のことが言えるとしたら、手に持っているものが、単なる紙切れではなく「ガバチヨ」という貨幣となると同時に、商品同士ならびにそれをやり取りする人間同士のつながり続けている関係性を「ガバチヨ」が体現していると考えられよう。

「ガバチヨ」に関わる物事を子どもたちが考える際には、自身以外の他者の存在についても考えざるを得ない。そして、自分・自分たちがよければよいのだという軸で判断することができなくなるのである。

この「ガバチヨ」が他者を抜きには成立しないということが象徴的にあらわれている事例として、A 幼稚園で数年に 1 度の頻度でみられる、子どもたちが「ガバチヨ」を自分たちで作ろうとするという活動が挙げられる。「銀行」から「ガバチヨ」がなくなることが度々起こることは既に述べた。そのような状況に対する子どもたちの対応はさまざまであるが、その中の一つに、「ガバチヨ」を子どもたち自身で作って解決を試みるパターンがある。「ガバチヨ」と同じような色の画用紙とペンをうい、ハサミで「ガバチヨ」と同じような大きさに色画用紙を切って、そこに「ガバチヨ」の象徴的な部分を手描きすることで「ガバチヨ」を作ろうと試みる。精度はさまざまであるが、「ガバチヨ」を模写し、図のように数字や人など、象徴的な模様を再現しようとすることが多い。子どもたちが作ったものを「自作ガバチヨ」と表記する。年によって過程はさまざまであるが、この「ガバチヨ」を作る活動の結末は共通しているという。このような、子どもたちによって作られた「自作ガバチヨ」は流通することがないのである。



図 4 子どもたちが作った「自作ガバチヨ」

では、なぜ子どもたちによって作られた「自作ガバチヨ」は流通しないのだろうか。この点について 2022 年 11 月 7 日に「自作ガバチヨ」に関するやり取りを、動画とフィールドノートをもとにしながら、分析する。

まずは 5 歳児クラスの A 児が「銀行」にきて、「ガバチヨ」が欲しいと「銀行」の子に伝え、「銀行」の子は、作った「自作ガバチヨ」を渡した場面の直後から始まる 2 分ほどの動画である。以下に、その動画に基づいた記録を記載する。

A 児は「銀行」の子どもから受け取った図 4 左のような「自作ガバチヨ」を、テーブルの上に置いてあった比較的模式が描き込

まれた図4右の「自作ガバチョ」と取り替えた。その後、A児は「銀行」から離れた。「銀行」から離れたA児に対して、筆者が「(「ガバチョ」)もらえた？」と問いかけると、A児は頷いていたが、しばらくの間2枚を見比べながら立っているだけで、買い物しようとする気配はみられなかった。「銀行」に行く前は、A児は「ガバチョ」をもらったら「おみせ」に買い物に行こうとしていたことが伺えた<sup>34</sup>にも関わらず、「自作ガバチョ」を受け取っても、そうはせずに立ち止まって「ガバチョ」を見ていたため、筆者にはA児が「ガバチョ」について何かを迷っているように思えた。少しして筆者が「(その「ガバチョ」をどこかの「お店」で)使う？」と問うと、小さく頷いた直後、首を横に傾げる動作をした。そのすぐ後に、A児は視線を「銀行」に向けた。筆者がA児の視線の先をみると、B児とC児が銀行にやってくる、その様子をA児が見ていた。

次にやってきたB児も、「銀行」から「ガバチョ」をもらおうとしていた。「銀行」の子から図4左のような「自作ガバチョ」を受け取ったB児は、裏表を見た後、一度は財布に入れようとしたものの、途中で手を止めて、テーブルの上に置いた。その様子を見ていた筆者が「あれ？(戻しちゃって)いいの？〇〇(B児の名前)？」と尋ねると、B児は笑顔で「うん」と答えた。続けて筆者が「なんで？」と問うと、B児が自身の財布の中に数枚の「ガバチョ」があることを確認しながら、「まあいいや。まだ「ガバチョ」があるし。(隣にいるC児が持っていたB児・C児が所属する「オシャきら」<sup>35</sup>の「ガバチョ」を入れる箱を触りながら)まださ、「オシャきら」の「ガバチョ」が、まだいっぱいあるから、いいよね」C児(笑顔で)「(筆者註：不明瞭に話した後に)あるしね」B児が同意したように頷いた。その後、何も受け取ることなく、「銀行」から立ち去った。

この様子は、まさに「自作ガバチョ」が紙切れとなるのか「ガバチョ」となるのか、A児が葛藤する場面であったと考えられる。「自作ガバチョ」を入れ替えていた様子から、A児はまず、見た目に着目していた。その後に出てくるB児とは異なり、一度は「自作ガバチョ」を受け取っている。この時点で「(ガバチョ)もらえた？」という質問に対して頷いているように、A児自身、個人の判断で「ガバチョ」であろうと判断したのである。この時点では「自作ガバチョ」は他者との関わりがない。しかし、A児は買い物にしようとする様子が見られなかったことと筆者の「(その「ガバチョ」)使う？」という問いに小さく頷いた後に首を傾げたように「使えるのか」つまり「他者とのつながりが可能か？」ということについてのA児の迷いが読み取れる。また、A児の視線の先には、同じ境遇の他の子どもがいた。「他の人はどうするだろうか？」と様子を見ていと推測できる。最終的には、A児は、B児・C児という他者が「自作ガバチョ」を受け入れるかどうかを注視していたのである。これは「使えるのか」「他者とのつながりが可能か？」ということを確認するためのA児なりの方法であったと解釈ができる。

このように、A児は当初自分という軸で判断をしたが、本当に「ガバチョ」になるためには「他者とのつながり」が重要であることをA児の言動から読み取れる。

また、A児たちの上記のようなやり取りの後、5歳児クラスの担任から、上記の動画と同日に新たな展開があった、と共有があった。エピソードの内容と時系列関係

は以下の通りである。

5歳児クラス全体に向けたニュースにて、「ガバチョ」作りました」という報告が「銀行」の子たちからなされたという。しかし、その場で別の子ども複数名から「いや、それ“偽物”じゃない？」「本当のお金はコピーしたり勝手に作っちゃダメだから(「銀行」の人が作るのはまずいんじゃない?)」などの指摘が入った。それを受けて、担任が「なんで「ガバチョ」を作ろうと思ったの？」と「銀行」の子たちに尋ねると、「ガバチョ」を渡せないのは困るから」「ガバチョ」がなくなっちゃったから」「でも、銀行が作った「ガバチョ」だから(使って)いいんだよ」と答えたという。結局その場では、「自作ガバチョ」の使用についての結論は出ず、「銀行」の子たちが「どうしたらいいのか考える」ということになったという。

表1 「自作ガバチョ」に関する時系列 (2022/11/7)

時間	子どもの動き
10:30 ごろ	「銀行」の子が「自作ガバチョ」を作り始める。
10:50 ごろ	A児が「銀行」から「自作ガバチョ」を受け取る。
12 時前後	片付け後、5歳児クラス全体で集まり、ニュースが行われる。

このエピソードでも、誰かが使えるかどうかを決めるような場面は見られず、「使える「ガバチョ」」であると他者から認識されることが重要であることがわかる。たとえ、「ガバチョ」を管理する役割の「銀行」が作ったとしても、つまり権威付けによって流通するわけでも、「ガバチョ」となる要因なのではない。

見た目が違うことから生じる迷い、「本当のお金はコピーしたり勝手に作っちゃダメだから」という実社会の貨幣文化を根拠とした迷い、など理由はさまざまであろうが、「自作ガバチョ」は、他者から受け入れてもらえないために流通はしない。つまり「自作ガバチョ」は、他者からさまざまな理由(それは個人によって異なるだろうが)で、つながりつづける関係性が維持できないからこそ、流通することがないのだと考えられる。そして、このような事例は、商品同士ならびにそれをやり取りする人間同士のつながり続けている関係性を「ガバチョ」が体現していることを示していると考えられるだろう。

#### 4.2 「ガバチョ」と流動性選好

遊びの中で経済を扱う、特に「おみせ」があり「お金」を扱うことは、稼ぐということと切っても切り離せないだろう。遊びの中で、子どもが稼ぐことに執着するならば、自分(もしくは、自分の「おみせ」)だけが儲けられればいい、といった利己的な考えが促進されてしまうのではないかと危惧するかもしれない。

このことを経済学の「流動性選好」という言葉で言い換えてみると、遊びの中で「お金」を扱うことで、子どもたちの流動性選好が必要以上に高まってしまい、利己的な考えが促進されてしまうことを危惧している、となるだろう。A幼稚園に当てはめるならば「ガバチョ」を貨幣としてみならず以上、子どもたちの「ガバチョ」に対

する流動性選好が必要以上に高まってしまい、利己的な考えが促進されてしまう、危険性があるのではないかとということになる。では実際はどうだろうか。

A 幼稚園の 5 歳児クラスの子どもたちの様子を見てみると、「ガバチヨ」に対する流動性選好は低いと考えられる。流動性選好が高ければ、例えば、できるだけ多くの「ガバチヨ」を所持することを欲したり、人に「ガバチヨ」をあげることを避けたり、「ガバチヨ」を多く得ることに重点を置いた言動が見られたりするだろう。そのような姿が全く見られないということはないが、子どもなりの理由があったり一時的であったりすることが多く、常に見られることはない。一方で、A 幼稚園では、商品を買おうとするときに「ガバチヨ」がなくて困っている人がいたら、自分のもっている「ガバチヨ」をあげるといった様子はよくみられる。また、それは商品を売る側にたっても同様で、お客さんが「ガバチヨ」をもっていない場合、「今日はなくてもいいよ」と言ってももらわず商品をお客さんに渡す、という場面も珍しくない。このような言動に関しての解釈はさまざまできる。例えば、自分の利益よりも他人の利益を優先する、という一種の優しさの表れと解釈する人もいられるかもしれない。しかし、流動性選好という観点で捉えると、「ガバチヨ」に対する流動性選好が低いのが故に、このような言動になったと考えることができる。

では、「ガバチヨ」に対する流動性選好は一貫して低いまなのだろうか。A 幼稚園での保育経験が 10 年以上ある教員らに話を聞くと、そうではないという。ある一定数の子の流動性選好が高まる時期があり、4 歳児クラスでは、「ガバチヨ」を何十枚も財布に溜め込む子が毎年、複数名出てくるという。このような現象は、流動性に対する欲望の表出であると考えられる<sup>36</sup>。

なぜ、子どもたちの流動性選好は低いのだろうか。また、毎年複数名いるという子どもたちの高まった流動性選好も、5 歳児クラスになると低くなる様子が見られるのはどうしてだろうか。

理由の一つとして、A 幼稚園が、ユートピアとでもいえるような環境であることが挙げられるだろう。本著では、人々が流動性を欲する理由として、不確実性に満ちている現実では、「ひとびとは、いつとは知れない将来にどれとは決めていない商品を買うために、しばらく貨幣を保有しようとおもうようになるのである」<sup>37</sup>ことを挙げている。一方で、現実社会と違い、A 幼稚園での生活は非常に安定している。衣食住など生存に関わることが保証されていることはいまでもないが、例えば、自分たちの生活の営み（「おみせ」で商品を作るなどといった活動）に必要なものは、共有財産として基本的には制限なく手に入り、使うことができる。また、「銀行」に「ガバチヨ」がある限り、手元に保有していなくても

「ガバチヨ」を受け取ることができる。このような環境によって、「ガバチヨ」を溜め込む必要性がないため、流動性選好が高まらないと考えられる。

裏を返せば、この安定が崩れる時が、A 幼稚園の経済の危機の一つであり、子どもたちにとっての課題となる。子どもたちは「銀行」に「ガバチヨ」がないという事象を、「ガバチヨ」を使った取引が好きだけできるユートピアの崩壊の危機とみなし、問題視するのであろう。

では、子どもたちはいかにしてこの危機に気づくのであろうか。4.1 にて、人間同士のつながり続けている関係性を「ガバチヨ」が体現していることを示した。つまり「銀行」に「ガバチヨ」がないという状況は、「おみせの人」と「お客さん」のつながりがなくなってしまい、自分たちの「おみせ」の成立が危うくなってしまいう危機に直結するのである。そしてそれは、子どもたちの「お客さんが商品を買ってくれない」「なんで買ってくれないかを聞いたら、「銀行」に「ガバチヨ」がないからって言われる」という発言からもわかるように目にみえる形で子どもたちの前に現れる。そのような現実と直面して、「ガバチヨ」が「銀行」にないという状況が、全体の危機だということに気がつくのである。そして、「銀行」に「ガバチヨ」がないという事象を危機とみなし、話し合いを行うのは「銀行」がある 5 歳児クラスが中心である<sup>38</sup>。「銀行」に「ガバチヨ」がなくなると「お客さん」が「ガバチヨ」を得ることができなくなる。すると「おみせ」でお客さんが買い物をしにきてくれなくなってしまふ。明らかに、「商品」を介したお客さんとのやりとりが滞ることになる。そのため、子どもたちが問題とするのは、取引という営みが滞ってしまうことである。このような、まさにユートピアが崩れる実体験を通して「ガバチヨ」は個人で溜め込むよりも、社会にまわした方が、他者にとってひいては他者との関わりの中で生活する自分にとっても良いということに気がつくのだろう。実際、ユートピア的な環境が保たれていれば、大量の「ガバチヨ」を保有する必要もなく、快適に生活することができるため、だんだんと流動性選好も低くなるのだろうと推測される。

以上でみてきたように、「ガバチヨ」という貨幣を扱っていても、A 幼稚園では子どもたちの流動性選好が必要以上に高まることもなく、利己的な考えが促進されることも考えられない。それどころか、「ガバチヨ」があることによって、ユートピア的な環境を自分たちで維持していこうという状況が生まれる。それは、結果的に子どもたちに利他的な視点を持つきっかけをもたらし、自分たちで自分たちの生活をつくっていくという力を養うことにつながるのではないだろうか。

#### 4.3. なぜ卒園は「最後の審判」とならないのか

前節で子どもたちの「ガバチョ」に対する流動性選好が必要以上に高くないと述べた。一方で「ガバチョ」が貨幣として使われていることから、実社会の貨幣と同様に、「ガバチョ」を未来の誰かが引き受けてくれる期待という、未来への先送りは行われていると考えられる。

では、子どもたちが「ガバチョ」を使わなくなる時、本著に沿って言い換えれば、子どもたちにとっての「最後の審判」の日はあるのだろうか。

素朴に考えれば、5歳児クラスの子どもの立場の視点で考えるとき、自身の卒園以降は、“自分たち”は「ガバチョ」を使わなくなり、卒園が「最後の審判」となるのではないかと、という説が出てくる。事実として、子どもたちは卒園を迎えることがわかっているにもかかわらず、「ガバチョ」を使用し続ける。「ガバチョ」が使われなくなるのは、A幼稚園独自の行事、年度末にある買った商品を家に持ち帰ってもよい日である「グランドバザール」<sup>39</sup>の後、「おみせ」の商品が全てなくなってからである。「ガバチョ」と交換する商品がなくなってはじめて、「ガバチョ」は使われなくなるのである。

なぜ卒園が「最後の審判」とならず、物理的に商品がなくなるまでは「ガバチョ」が使われ続けるのだろうか。5~6歳という年齢では、後ろ倒しの論理を考えることができないからだろうか。その可能性は否定できないがA幼稚園の子どもたちを観察していると、それだけでは説明できない興味深い子どもたちの言動がみられる。

卒園が間近になると、5歳児クラスにあるモノをどうするか、という話が子どもたちの間で出てくる。例えば、自分たちが作った木の「おうち」を卒園後も保育室に置いておくのか、今まで自分たちが管理していたトンカチと釘は誰に管理を任せたらいいのか、自分たちが持っている「ガバチョ」をどうするか、などである。そのような話題は「みんなで相談しよう」と子どもの誰かが提案し、学年全体の話し合いとなることが多い。その際、さまざま意見<sup>40</sup>が出るが、「ガバチョ」は次の5歳児クラスの人たち(今の4歳児クラスの人たち)に渡した方がいいんじゃないか」という話に落ち着くことが多いという。理由では「ガバチョ」がないと困っちゃうでしょ」「また「銀行」とか作って、「おみせ」ができるだろうから」など、自分たちが卒園した後も「ガバチョ」が使われ続けることを想定している内容が上がるが多い。

このことは、卒園は5歳児クラスの“自分たち”にとっては「最後の審判」の日であるかもしれないが、“A幼稚園”にとっては「最後の審判」の日ではない、という子どもたちの考えがあることを示している。子どもたちは、A幼稚園という場は、未来永劫続くと思っているのかもしれない。だからこそ、卒園という日が迫っても、「ガバチョ」への期待は損なわれず、使われ続けるのではないだろうか。

一方で、それは、自分たちがA幼稚園という「ガバチョ」を使った共同体から抜けることを理解し、かつ、A幼稚園という場ではまた次の世代が自分たちと同じように「ガバチョ」を使い続けるんだろう、と自分たちがいない世界でも物語は繰り広げられる、ということ想定している。自分の視点・自分がいないA幼稚園の視点と少なくとも2視点で俯瞰して捉えていると考えられるだろう。子どもたちがこの点においてのみ俯瞰しているのか、俯瞰する力というものが養われておりその表出であるのかは、この後の課題としたい。

さらに、卒園に伴って、自分たちの家に「ガバチョ」を持ち帰るという提案もできるはずだが、それをせず次の世代に「ガバチョ」を渡すことを選択することにも注目したい。ここから、子どもたちは自分たちがいない世界が困らないように「ガバチョ」を託そうという考えに至っていると捉えられる。つまり、子どもたちは、利他的な態度も養われていると考えられる。

これらのことは、「ガバチョ」を使うことによってだけで養われたわけではないはずだ。しかし、4.1にて商品同士ならびにそれをやり取りする人間同士のつながり続けている関係性を「ガバチョ」が体現していると述べたように、「ガバチョ」を「ガバチョ」として持っている限り、他者とのつながりが発生しているという特殊性が、他者との関係について考える機会を増やしていることは想像に難くない。

#### 4.4. 貨幣共同体的な学級のあり方

本著から捉えると、A幼稚園は「ガバチョ」を介した貨幣共同体的な集団であるとみなせる。A幼稚園の集団の形成は、伝統的な慣習や情念的な一体感にもとづいているのでもなければ、目的合理的にむすばれた契約にも基づいているわけではない。そこで、仮にA幼稚園の集団を「ガバチョ共同体」と呼ぶことにする。

A幼稚園では、一人一人のやりたいことが尊重されている。洋服をつくるのが好きな子や、ステージで踊ることが好きな子、科学実験に関心がある子…など、さまざまである。貨幣共同体は、このような背景は関係なく、共同体として成立させることができる。なぜなら、そもそも、貨幣共同体とは差異が尊重されるような共同体だからである。この点については、古林(2021)で分析した「経済活動が成立するためには互いに差異があり分業をすることが前提になるので、A幼稚園では互いに異なることが尊重されている」<sup>41</sup>ということとも矛盾しない。つまり、貨幣共同体では、互いに差異があり分業をすることが前提になるので、A幼稚園では互いに異なることが尊重されているといえよう。

さらにそこには、個人間での親しさや大人との利害関係とは異なる、単に「ガバチョ」という同じ貨幣を貨幣

として使っているだけの集団、という新たなつながりを子どもたちの間にもたらす。「ガバチョ」が「銀行」からなくなってしまう、ということは、「ガバチョ共同体」であるがために「みんなが関係すること」として5歳児クラス全体の問題として取り上げられると解釈が可能である。「ガバチョ」によってつながっているこの共同体では、個人間の親しさなどは関係なく、問題が起これば、それは間違いなく自分ごととして捉えられ、それぞれが主体性を持ちながら解決に向けて行動を移す。その際には、4.2 で扱ったようなユートピアの維持のこと、つまり全体にとっての利益、他者との兼ね合いも考えなければならない。そのような A 幼稚園の子どもたちの取り組みは、「ガバチョ共同体」で共生するための試行錯誤の営みとも言い換えられるだろう。

ここで留意しておきたいのは、「ガバチョ共同体」の基盤のうえに成立している子どもたちの社会は、実社会のような「貨幣共同体の基盤のうえに成立している資本主義社会」<sup>42</sup>ではないことである。4.2 で詳しくみてきたように「ガバチョ共同体」では、一人一人の流動性に対する欲望は強くなく、ユートピア的環境下では「資本」は意味をなさず、さらに、仮に保持していたとしても保持していた「ガバチョ」は年度末にリセットされる。つまり、子どもたちの言動の軸として「資本」が置かれづらい環境となっており<sup>43</sup>、その意味で明らかに資本主義社会とはみなせない。そうだとすると、子どもたちは「資本」に代わる軸として何を置き、一体どんな社会を形成しているのであろうか。この点を明らかにすることは、A 幼稚園の保育の構造に迫ることにつながるだろう。本著から保育実践を捉えることで、このような新たな問いを導き出すことができた。この問いそのものについては、今後明らかにしていきたい。

## 5. おわりに

本稿の目的は、2 つあった。1 つ目の目的は園通貨「ガバチョ」という経済の要素が子どもたちにいかなる影響を与えているかその一端を明らかにすることであった。

まず、「ガバチョ」が商品同士ならびにそれをやり取りする人間同士のつながり続けている関係性を体現した存在だということについて事例を示しながら論じた。また、「ガバチョ」を持っている限り他者とつながり続けるという意味において、A 幼稚園という集団が貨幣共同体的なあり方となり、それが個人間での親しさや大人との利害関係とは異なる関係を子どもたち同士の間に生み出す、ある事象について学年全体の問題として自分ごととして主体性を持って課題を解決しようとする、といったさまざまな影響を与えることを考察した。

また、A 幼稚園では園通貨という経済の要素を取り入

れたからといって、子どもたちの流動性選好が必要以上に高まることはなかった。利己的な考えが促進されるどころか、ユートピア的な環境を自分たちで維持していこうという状況が生まれ、結果的に子どもたちに利他的な視点を持つきっかけをもたらし、自分たちで自分たちの生活をつくっていくという力を養うことにつながる可能性が示唆された。

さらに、4.4 でみたように、A 幼稚園が貨幣共同体的なあり方をしているところから、子どもたちは「資本」に代わる軸として何を置き、一体どんな社会を形成しているのかという新たな問いを導くことができた。このような新たな保育実践を分析する視点を導くことができたことも一つの成果として挙げられるだろう。

2 つ目の目的は、教育実践を経済という観点から捉えることの可能性や意義を考察することであった。まず、子どもたちの言動に関して、より踏み込んだ考察を可能にするとわかった。例えば、4.1 で扱った A 児の言動は、単に使えるかどうか迷っていたとも取れる。しかし、今回の考察を通して、A 児は自分本位の視点から、他者とのつながりを踏まえるという別の視点へと意識が変わっていったという A 児の視点の移り変わりを捉えることができた。また、同じく 4.1 で扱った「銀行」が「自作ガバチョ」を作る活動も、貨幣としての文化に触れたという意義と自分・自分たちだけ良ければ済むということではなく、他者からの承認が必要な物事があるということを経験する機会になった、と意味づけることができる。

また、4.2 にて教育現場で経済の要素である「お金」を扱うことへの不安を「流動性選好」という経済学の概念を用いたことで問題が明確化し、より具体的に検討することが可能になった。このような課題の整理についても、経済的観点を活かすことができることが示唆された。

課題として、本稿で取り上げきれなかった「ガバチョ」の分析項目がいくつもあったことが挙げられる。例えば、「ガバチョ」の使われはじめについての分析はできていない。どのように使われはじめられるようになり、どのように使われなくなるのかについて分析をすることで、子どもたちの「ガバチョ」観ならびに、「ガバチョ」がいかなるつながりを体現しているのかを考察することができるのではないかと考えられる。また、本著だけでは分析しきれない点も出てきた。今後は、経済学や経済を扱っている人類学などより多くの知見を活かして、経済的観点から保育実践を捉えることを試みていきたい。

<sup>1</sup> A 幼稚園は、2021 年 11 月より認定こども園に移行している。そのため、A こども園とも表記することができるが、過去の文献との表記ずれによる混乱を避けるため、本稿では A 幼稚園と表記する。

<sup>2</sup> 筆者は古林(2021)にて、「お金」に着目をして「キャッシュ

レス決済」を導入した保育実践の分析を行った際に、「お金」を使った保育実践について戦前から現代まで先行研究を調査した。しかし、経済的観点からの貨幣や経済そのものと絡めて分析している文献は、確認できなかった。

<sup>3</sup> のちにも取り上げるが、A 幼稚園の園通貨についての概要を示した新垣(2006)、藤川(2018)では A 幼稚園の経済について、また古林(2021)では、それら先行研究を含めた A 幼稚園での園通貨の使われ方についてまとめている。

<sup>4</sup> 研究分野については、岩井克人本人によって運営されている「岩井克人の Web ページ」(<http://iwai-k.com/index-j.html>)を参考とした。(2023 年 2 月 14 日最終確認済み)

<sup>5</sup> 丸山ら (2020)、p.81

<sup>6</sup> 丸山ら(2020)、p.81

<sup>7</sup> 丸山ら(2020)、pp.83-85

<sup>8</sup> 岩井克人(1993)『貨幣論』筑摩書房(以下、本著と記載)、p.222

<sup>9</sup> 本著、p.222

<sup>10</sup> 例えば、貴金属としての金が挙げられる。

<sup>11</sup> 本著、p.81

<sup>12</sup> 本著、p.56

<sup>13</sup> 本著、p.158

<sup>14</sup> 本著、p.198

<sup>15</sup> 本著、p.182

<sup>16</sup> この例の内容は、本著、pp.185-186 の内容を筆者がまとめたものである。

<sup>17</sup> 本著、p.186

<sup>18</sup> 本著、p.186

<sup>19</sup> 本著、p.190

<sup>20</sup> 本著、p.190

<sup>21</sup> 本著、p.190

<sup>22</sup> 本著、p.199

<sup>23</sup> 本著、p.200

<sup>24</sup> 本著、p.200

<sup>25</sup> 本著、p.200

<sup>26</sup> 本著、p.200

<sup>27</sup> 本著、p.201

<sup>28</sup> 本著、p.201

<sup>29</sup> 2022 年度の A 幼稚園の 5 歳児クラスは、さらに 2 クラスに分かれており、それぞれに担任が割り当てられている。フリーとはその学年のサポートに入る者のことを指している。なお、保育は、毎年クラスの合同、学年全体で行われている。

<sup>30</sup> 「ガバチョ」が使われ始める時期は、子どもの様子によって変わる。新垣(2006)によると過去には 10 月に使われ始めた年もあったという。

<sup>31</sup> 筆者が「おみせ」においてある「ガバチョ」を指し、ある子どもに「この「ガバチョ」は使っているの？」と尋ねたことがある。すると、その子は「「おみせ」の「ガバチョ」だからダメだよ。「ガバチョ」は「銀行」でもらえるよ」という旨を答えた。多くの子がこのような意識を共有している。ただし、誰かによって徹底されているわけではなく、場合によっては「おみせ」の「ガバチョ」を個人が使うこともある。

<sup>32</sup> これまでの A 幼稚園での先行研究で「ガバチョ」を園通貨という一種の貨幣としてみなしていること、また園の教職員や子どもたちも「ガバチョ」指して「お金」と呼ぶことが度々あるという実態を踏まえて、本稿では「ガバチョ」が貨幣であるということを前提に論じていく。一方で、そもそも「ガバチョ」が経済学における貨幣であるのかということも議論の対象となりうることは留意し、今後の課題として扱っていきたい。

<sup>33</sup> 本著、p.59

<sup>34</sup> この時は、他の学年の保育室にある「おみせ」に多くの 5 歳児クラスの子たちが「ガバチョ」を持って、買い物しへ行っていた。A 幼稚園では他の学年の保育室に行くときには、カラー帽子を被ることになっており、A 児もカラー帽子を着用していたことから、他の 5 歳児クラスの子と同様に他の学年の「おみせ」に行くようにしていたという予想は妥当だろう。さらに、A 児は「銀行」に行く前「ガバチョ」を一枚も持っていなかった。ただ他の保育室に行くだけであったら「ガバチョ」はいら

ないはずであり、カラー帽子を被って「銀行」に訪れていたことから、A 児は「ガバチョ」をもらい、そのまま買い物をしに行くこうと考えていたのだろう、と当時、筆者は推測していた。

<sup>35</sup> 「オシャきら」は、2022 年度の保育実践における、商品としてアクセサリーや帽子・洋服などを作ることをメインの活動としていた「おみせ」である。この「オシャきら」はのちに他の「おみせ」と合併し「キュピオシャ」に改名した。

<sup>36</sup> なお、A 幼稚園では、誰が溜め込んでいるのか把握は子ども理解のために必要であるとされるが「この年齢の子にはよくあること」「でも 5 歳児クラスになると変わるから」といって、すぐに解決しなければいけない案件だと問題視したり、教員が子どもに溜め込むのをやめさせようとしたり、といったことはない。A 幼稚園の教員は、経験則として流動性選好を大人が押さえ込むことよりも(あくまでの「ガバチョ」の、であるが)流動性に対する欲望の先にどのような結末がおとずれるのかを経験させることの方がその子のためになると考えている。

<sup>37</sup> 本著、p.160

<sup>38</sup> 4 歳児クラスでも稀にこのことを問題として、子どもが取り上げることがあるが、結局、5 歳児クラスへ相談し、4,5 歳児が合同で考える形をとることが多い。このようになることについて、A 幼稚園の保育教諭は「発達段階的に、4 歳さんだとまだ抽象的なことが考えられない子が多いから、必然的に「ガバチョ」の流れみたいな抽象的な問題は 5 歳さんで話されることが多くなる」との見解を示している。

<sup>39</sup> グランドバザールは、毎年、卒園式の 1~3 週間前に 1 日で行われる。普段は 1 日の終わりに「おみせ」に返す商品で、その日に買ったモノだけは家に持ち帰ることができる。この日に全ての商品が「おみせ」からなくなる。A 幼稚園に長く勤めている保育教諭によると、毎年グランドバザールの後は、商品を再び作る子もいるが、卒園式の後「おみせ」をどうするのかという話し合いをしたり、卒園式の練習をしたり、という時間が多くを占め、この日以降「ガバチョ」を使った商品のやり取りはほとんど見られなくなるという。

<sup>40</sup> 他の意見としては、例えば「そのまま 5 歳児保育室に置いておけばいいんじゃないか」「園長先生に渡したらいいんじゃないか」などがある。なお、「みんな(3、4、5 歳児クラス)に配ればいいんじゃないか」というその言葉だけを取り上げると「ガバチョ」を持ち帰りたいともみなせそうな意見が出ることもある。しかし、その意見に対して「でも、もう商品がないから意味ないんじゃないか」や「でも、自分たちはいなくなるんじゃないか」という意見が出て、意見を出した子も「ああ、確かに」と納得するというやり取りが見られることから、「持ち帰りたい」という趣旨で意見しているわけではないと考えられる。

<sup>41</sup> 古林(2021)、p.39

<sup>42</sup> 本著、p.212

<sup>43</sup> このような環境は保育教諭によって人為的に仕組まれている。しかし、これまで A 幼稚園ではこのような環境とする意図について「資本」と絡めて語られてこなかった。

#### 引用・参考文献

- 阿部学(2017)『子どもの「遊びこむ」姿を求めて—保育実践を支えるリアリティとファンタジーの多層構造』白桃書房
- 新垣理佳(2006)「幼児教育における「仕事」の時間のカリキュラム開発—芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム」、千葉大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻修士論文
- 岩井克人(1993)『貨幣論』筑摩書房
- 玉野和志(2016)『ブリッジブック社会学[第 2 版]』信山社
- 藤川大祐(2018)「教育における時間概念に関する考察—ある幼稚園の実践事例をたよりに—」授業実践開発研究、第 11 巻、pp.1-9
- 古林智美(2021)「遊びに「キャッシュレス決済」を導入した保育実践の事例研究」令和 3 年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文
- 丸山俊一・NHK「欲望の資本主義」制作班(2020)『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社